

社会言語学の新潮流

—‘Superdiversity’が意味するもの—

三宅 和子

要 旨

この論考では、世界のグローバル化や流動性が顕著になってきた現代社会において、新たな地平からことばと社会の関係を論じる社会言語学の新潮流の動向に考察を加える。まず、従来の社会言語学の研究対象や研究領域、現象の捉え方について概観する。次に、過去 10 年ほどの短期間に活発な活動を展開している社会言語学の新潮流について、その社会とことばへのアプローチを、‘Superdiversity’と移動性、複雑性¹というキーワードを用いて解説する。最後に、この新しい社会言語学の課題と日本におけるパラダイム・シフトの意義について述べる。

キーワード

Superdiversity グローバル化 移動性 複雑性 流動性

1. 従来の社会言語学の研究と現象の捉え方

社会言語学は、言語が実際の社会において具体的にどのように使われているかを探ろうとする学問である。社会言語学が 20 世紀後半に現れる前までの「言語研究」は、伝統的には言語を実際の社会から切り離し、文法、意味、語彙、音韻などに切り分けて研究する傾向が強かった。しかし社会言語学は、ことばの成立や使用には社会や文化との関係が切り離せないことに注目し、個人やその個人が属する集団の言語運用や言語現象を、背景となる社会とのかかわりの中でとらえ、考察してきた。

社会言語学が取り扱う現象とその研究の範囲は、研究者によって把握や理解の仕方が異なる。また、欧米社会で関心をもたれやすい課題や現象と、日本で重視される課題は必ずしも一致していない。表 1 は世界の社会言語学の主な研究対象や領域をまとめたものである。日本では、日本語が話せれば基本的な社会生活には支障がないが、社会階層や親疎関係と深く結びついた言語使用の法則を知らない人間関係が保たれない恐れが強い。このような社会の特徴を反映して、日本における社会言語学では、例えば方言をはじめとする言語変種の研究や敬語などの対人関係の言語行動研究などが盛んに行われてきた。一方世界の多くの地域では、ひとつの国で複数の言語が日常的に使用されたり、移民の流入、国境の崩壊や統合で言語や文化が変容したりする現象が身近に起こる。このような地域では、例えば言語選択、言語維持と消滅、ピジン・クレオール、複数言語併用などの言語研究が盛んに行われてきた。

表1 社会言語学的主要な研究対象・研究領域

- | |
|--|
| 1) 方法論 (研究方法の種類と特徴、研究テーマに対する適性など) |
| 2) 言語変種 (地域差、年齢差、性差、集団語など) |
| 3) 言語行動 (場面による言語選択、敬語運用、コミュニケーション行動など) |
| 4) 言語生活 (生活環境と言葉、命名など) |
| 5) 言語接触 (方言と共通語、外来語、二言語併用、言語選択など) |
| 6) 言語変化 (共通語化、ネオ方言、移住と言葉など) |
| 7) 言語意識 (言葉の規範、アイデンティティ、差別語など) |
| 8) 言語習得 (第二言語習得、中間言語など) |
| 9) 言語計画 (国語政策、国語国字改革、日本語教育など) |

(三宅 2007) より

2. 社会言語学の新しい潮流

ところが、このような社会言語学の枠組みを揺るがすような変化が、過去 30 年ほどの間に世界規模で起こってきた。グローバル化現象がもたらしている変化である。グローバル化とは、世界の異なる地域での社会的、文化的、経済的变化が、旧来の国家や地域などの境界を越えて地球規模に拡大して様々な変化を引き起こす現象である。20 世紀末以降、爆発的に浸透してきた電子メディアも、この変化を促すのに貢献した。一国で発生した社会問題、流行病、金融問題が国家の枠を超えて世界に広がり、もはや一国の中で解決できないような事態が増加しつつある。

このような世界の状況は言語にも大きな影響を与えている。Blommaert (2010) は、ポスト構造主義時代の言語状況を ‘Superdiversity’ という用語で総括し、この現実の描写と問題の解決には、新しい社会言語学の視座が必要であると主張する。‘Superdiversity’ という用語は本来、Vertovec が論文 “Super-diversity and its implications” (2007) において移民の変容について論じた際に用いたのが嚆矢だといわれている。この論文では、過去約 30 年間で起こってきた移民状況の変化と、その変化によってもたらされた、多様性がさらに多様化していく状況を、“diversification of diversity” と捉え、社会の大変革が進行していることを指摘している。

Blommaert (2010) はこれを踏まえ、社会言語学に突きつけられている課題の複雑性に注意を喚起し、「グローバル化によって、社会言語学はその古典的な切り分け方や偏向的な見方がもはや通用しないことを自覚させられ、言語を対象とするのではなく、移動性をもった資源 (mobile resources) を研究する社会言語学として捉え直すことが求められている」(2010:1) としている²⁾。

‘Superdiversity’ とは、具体的にはどのような言語状況をさしているのだろうか。以下は、2013 年に Max Planck Institute が行ったインタビュー³⁾における Blommaert の説明をまとめたものである。この具体例に示された複雑性は、旧来の社会言語学では無視されたり、切り落とされたりしてきたものだと述べ、現在の言語状況を読み解き問題に対処するには新たな枠組みが必要であるというのが彼の主張である。例として使われているのは、

ベルギーのアントワープにおける社会福祉のフィールドワークの事例である。

イラクからの難民女性がスカイプを通して、イラクに住む兄（弟）と、自身の3人の子どものうち重度の障害をもつ子の養子縁組の方法について相談している。この女性のわずか12メートル四方の住居には、社会福祉士1名、市の地方行政課職員、福祉行政課職員、通訳者の3名、エスノグラファー1名の計5名が集まり、女性の手助けをしたり記録したりしている。ここで行われている会話や言語行動には、宗教の問題、煩雑な手続の問題、養子縁組の適格性、貧困問題など、このケースに固有な様々な側面が関わっている。Blommaertは、これらの側面すべてに目を向けることが新しい社会言語学の使命であると考えている。旧来の社会言語学では、複雑性を切り落とし顕著な特徴に注目して研究成果を示してきた。例えばイラン女性と福祉士の会話のみに焦点を当てて分析し、12メートル四方の狭い空間でひしめく人の中で交わされた会話であることを考慮から除外したり、兄妹間のやりとりがオンラインのそれであったことや、そこに現れる宗教的な側面を無視したりすることなどを指している。すなわち、これまでの社会言語学の研究では、避けたり横においたり周辺化したり見過ごしたりしてきた問題を直視する必要があること、そうしてこそ、現実世界の多様性が初めて非常に明確に直接的に見えてくるのだと主張している。

3. 新潮流の動向

このようなポスト構造主義の立場から、言語使用のダイナミズムに注目し、言語研究のパラダイム・シフトの必要性を説く社会言語学や言語教育の研究者たちは、大きな潮流を作りつつある。ことばは人々が関与するあらゆる社会・文化に深く根ざした活動の産物である（Pennycook, 2010:1）ことに目を向け、それぞれの話者が行う言語実践の流動的な姿を、静的に把握しようとする現状（Flores and García, 2013）から袂を分かつべきであると主張し、従来のBilingualismやMultilingualism研究の言語の見方（モノリンガルを基準としての二言語や複数言語を考察するという立場）に対しても、批判的な姿勢を強めている。様々な研究者が、グローバル化がもたらした、流動的な現象の描写と説明を試みており、Transidiomatic practice（Jacquemet, 2005）、Polylingualism（Jørgensen, 2008）、Multivocality（Higgins, 2009）、Translanguaging（García and Li Wei, 2014）、Metrolingualism（Pennycook and Otsuji, 2015）などの用語が生まれている。

この数年間の社会言語学の領域で、SuperdiversityやGlobalization（Globalisation）を冠したものだけでも、大きなプロジェクトの創設、国際会議の開催、様々な刊行物、雑誌特集が目立ち、インパクトを与えてきた。

まず大規模プロジェクトとしては、2010年にInternational Consortium for Language and Superdiversity（InCoLaS）がティルブルフ大学（オランダ）、ロンドン大学キングスカレッジ、パーミンガム大学（イギリス）、コペンハーゲン大学（デンマーク）、西ケープ大学（南アフリカ）、ユヴァスキュラ大学（フィンランド）をコアメンバーとして組織され、2012年にはMax Planck InstituteのSociolinguistic Diversity Working Groupとの共同研究が始まっている（その後アメリカ、アジア、太平洋地域にまで共同研究の輪が広がっている）。また、Institute for Research on Superdiversity（IRiS）がパーミンガム大学に

設立され、2014～2018年の計画でイギリスの4都市での‘Translation and Translanguaging: Investigating linguistic and cultural transformations in superdiverse wards in four UK cities’の活動が始まっている。学会開催としては、2013年には‘Language and Superdiversities: Explorations and Interrogations’がフィンランドで開催され、2014年にはバーミンガム大学で‘Superdiversity: Theory, method, and practice in an era of change’が開催された。2015年には、3月にジョージタウン大学のGURTが‘Diversity and Superdiversity: Sociocultural linguistic perspectives’をテーマに開催され、5月には香港大学で‘Sociolinguistics of Globalization’が開催された。

刊行物としては、Blommaert (2010, 2013)、Arnaut, Blommaert, Rampton, Spotti, eds. (2016)のほか、上述の新しい用語を冠した書籍が多数刊行された。それ以外の、グローバル化やトランスナショナル、モビリティなど言語を結びつけた書籍まで入れると、枚挙にいとまがない。さらには、グローバル化に伴う言語の多様性や新社会言語学関連の論考を集めた、大部のリーダー (Coupland and Jaworsky eds., 2009) や、ハンドブック (Coupland, ed., 2010) も刊行されている。

4. パラダイム・シフトの意義と新潮流の課題

上記のようなパラダイム・シフトは、当然ながらアイデンティティをめぐる問題にも関与してくる。従来の社会言語学では、ことばは伝統的には個人とその周辺の世界との関係を示し、個人の属性や行動は、その社会に固有なものとして決定されているように説明され、不変で固定的なものであるように捉えられる傾向があった。しかし、新たなパラダイムでは、アイデンティティはダイナミックで文脈依存的なものとして捉えられ、固定的なものではなく、行動や実践やコミュニケーションの中で形作られていくものとして扱われる。アイデンティティは交渉可能であり、人生を通じて形作られ変容していくものであるという考え方は、グローバル化の中で多くの人が国境を越え移動し、帰属する社会や国が固定されない状況が拡大するにつれ、次第に説得力を増してきている。

さて日本という、東アジアの東端の、周りを海に囲まれた島国に住んでいると、これまで示してきた、移民や難民の問題、「移動」の問題に代表される **Superdiversity** が、自らの問題として意識されたり内面化されたりしにくいかもしれない。しかしグローバル化は、世界の異なる地域でのさまざまな出来事が国家や地域の境界を越えて拡大し影響を与える現象である。近年、日本を離れてトランスナショナルに生きる日本語話者が増加し、日本に留学したり定住したりする非日本語話者の多様化が急速に進んでいる状況を考えると、**Superdiversity** が少しは現実味を帯びてくるのではないだろうか。このような流動的な動きの中で、これまで日本語話者が枠組みにしがちだった、日本と海外 (日本以外)、日本人と外国人 (日本人以外)、日本語と外国語 (日本語以外)、「自らと他者」という2項対立の構図は、世界を理解する上で無意味であることが次第に自覚されるようになってきている。それどころか、このような見方が、世界把握や相互理解、共存を妨げていることにも気づかれなければならない。**Superdiversity** は日本語話者にとっても重要なコンセプトであり、この視点や突き付けられている問題は、言語教育や日本語教育の文脈において確認

し、実践の中で解決を考えていくことが求められているといえよう。

最後に、新潮流の思考や行動を追ううちにじわじわと感じるようになってきた、これまで述べてきたことに一見反するような感覚について述べておきたい。

Superdiversity に注目する研究者たちが要請する、複雑で流動的な状況の把握とパラダイム・シフトは、筆者のように、ひととことばの関係や変容をグローバル化する世界の中で把握しようとする立場からは、非常に説得力があり、極めて重要な提案であると認識される。しかしながら、その研究手法には、現在のところ十分に納得できないものを感じている。例えば、**Blommaert** がインタビューで述べたような状況の複雑性、あるいは **Pennycook & Otsuji** (2015) が描写する様々な話者の、従来の言語学者からは支離滅裂な **code-mixing** 状態としか把握されなかった言語実践が次々と提示されるとき、その極めて優れた描写性とと唆に富む指摘に共感の念を禁じ得ない。しかし、従来の社会言語学が否定される中で、新しい社会言語学の研究はどのようになされ、研究方法はどのようなものであるべきなのかが、十分に説明されたり提案されたりしているという印象は受けない。

García & Li Wei (2014) は言語教育を主眼とした論考だが、新しい概念 ‘**Translanguaging**’ の例として日本人学習者の実践を報告している (2014:86-88)。語彙練習で分からない部分を日本語で考えたりする実践や、研究調査をするときに日本語の文献も使ったりする実践が報告されているが、従来から一般的に行われている方法とどう違うのか、これらが **Translanguaging** という用語で扱われる理由や新しさが見えにくい。また **Translanguaging** の実践として、文の途中で切り替える例や、留学生同士が作業中に母語で理解を確認し合ったり分からない所を教え合ったりしながら授業についていく例が提示されているが、従来の社会言語学で解説される **code-switching** とどのように違うゆえに、**Translanguaging** と呼ばれるのかが分かりにくい。言語事象を見るパースペクティブ (視点) が異なるとはいえるが、その視点をもって教育すればそれが新しいパラダイムだというわけにはいかない。従来の教育法や社会言語学の見方とどのように異なるか、どのように変わる必要があるか、具体的には何をするのかをさらに丁寧に説明する必要がある。

グローバル化がもたらす変化は、既存の認識を覆すほどのものであるという感覚が、言語研究のみならず、様々な社会科学の分野で共有されている。**Superdiversity** をめぐる議論が社会言語学や言語教育の研究者の間に急速に広まっているのは、重要な転換期に直面しているという認識の現れであり、それを知らしめることには大きな意義があると考えている。しかし、スローガンが先行し、整理されるべきことや、地道で精緻な研究や、研究方法の相互研鑽がそれに追いついていないのではないかという危惧を感じるのは私だけだろうか。このような見方は、従来の社会言語学的見地から解放されていない立場からの批判だと逆批判を受けるかもしれない。共同で行われている大プロジェクトの調査からの成果が出た暁には、新たな研究の視野と方法論が示されていくことを期待している。

今後は、私たち研究者・教育者一人一人が突きつけられている現実を自覚し、その上で、自らの研究にどのように反映させ、どのように研究方法や教育を切り拓いていくかが問われているといえよう。

注

- 1 移動性は Mobility、複雑性は Complexity の訳である。Superdiversity は超多様化と訳すこともできるが、英語に込められたニュアンスを重視してそのまま提示する。
- 2 英文論文・著作の和訳は筆者による。
- 3 Max Planck Institute の HP に掲載された ‘Interview with Jan Blommaert.’ による。
<http://www.mmg.mpg.de/diversity-interviews/blommaert/> (2016年1月5日閲覧)

参考文献

- 三宅和子 (2007) 「社会言語学」 荻野綱男編『現代日本語学入門』 pp.180-195 明治書院
- Arnaut, K., Blommaert, J., Rampton, B., Spotti, M.(eds) (2016) *Language and Superdiversity*. Routledge.
- Blommaert, J. (2010) *The Sociolinguistics of Globalization*. Cambridge: Cambridge University Press
- Blommaert, J. (2013) *Ethnography, Superdiversity and Linguistic Landscapes: Chronicles of complexity*. Multilingual Matters.
- Coupland, N. and A. Jaworski(2009) *The New Sociolinguistic Reader*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Coupland, N. (ed.) (2010) *The Handbook of Language and Globalization*. Oxford: Wiley-Blackwell.
- Flores, N. and García, O. (2013) ‘Linguistic Third Spaces in Education: Teachers’ Translanguaging Across the Bilingual Continuum’ in D. Little, C. Leung and P. Van Avermaet(eds.) *Managing Diversity in Education: Key Issues and Some Responses*, 243-256 Multilingual Matters.
- García, O. and Li Wei(2014)*Translanguaging: Language, Bilingualism and Education*. Palgrave Macmillan.
- Higgins, C. (2009) *English as a Local Language: Post-Colonial Identities and Multilingual Practices*. Multilingual Matters.
- Jacquemet, M. (2005) ‘Transidiomatic Practices: Language and Power in the Age of Globalization’, *Language and Communication*, 25, 257-277.
- Jørgensen, J. N. (2008) ‘Polylingual Languageing Around and Among Children and Adolescents’, *International Journal of Multilingualism*, 5(3), 161-176.
- Pennycook, A. (2007) *Global Englishes and Transcultural Flows*. Routledge.
- Pennycook, A. & Otsuji, E. (2015) *Metrolingualism: Language in the City*. Routledge.
- Regan, Vera, Chloe Diskin and Jennifer Martyn ed.(2016) *Language, Identity and Migration:Voices from translational speakers and communities*. Bern: Peter Lang.
- Vertovec, Steven (2007). Super-diversity and its implications. *Ethnic and Racial Studies* 30 (6): 1024-1054.
- Vertovec, Steven (2016) *Super-diversity*. London and New York: Routledge.

(みやけ かずこ 東洋大学文学部)